

未来世界仕様書 Vol. 25 Ver.1.0



未来世界仕様書

Vol.

25

Ver. 1.0

パッヘルベルのカノン礼賛エッセイ カノン徒然 第25弾

演奏の楽しみ

京端メタ某

6年間も練習すると、何となく、自分の身についた気がします。

何のこと？って、

カノンのピアノ演奏。

楽譜は、「ピアノピース2週間マスターNo.4 CANON パッヘルベルのカノン」全音楽譜出版社、なんですけどね。アレنجは久木山直

2週間マスター！アハハ。

年をくってからでも続けると、ゆつくりですが、上達するものです。

弾き始めのころは、ふたりの先生に一回づつ指導も受けました。かかってないこと。真剣度の現れ！

左手が動くようになり、ひとつひとつの音符に耳を澄ませながら弾けるようになりました。

自分で弾くと、何が良いつて和音の響や振動を、直接、楽器から受けて、体感できること。一部であっても、超スローでも、代えがたい楽しみ！！

だから続くのでしょね。

しかも楽譜指定の速度で弾ける唯一の曲となり。

記念にアップしようかな。

ただし、暗譜はできていない。

京端の頭脳の海馬は、領域が歯抜けになっっているのか、狭いのか、初めから終わりまで通して曲を並べられないんですかね。楽譜を見ればいいので、気にしないことしております。

次の目標にしてもいいけど。

欲も出て他のバリエーションを試しています。今は3つ。

・全音ピアノピースNo.148 パッヘルベルのカノン／パッヘルベル 全音楽譜出版社 アレンジは後藤丹

難しい！同時に弾く鍵盤が多すぎ、遠すぎ。でも、二長調の響が格別。

原譜のバイオリンが奏でる「3声のカノンと低音のオスティナートによる枠組みを完全に保持」とあるので、ぜひマスターしたい！

2年程の練習のうち、最後8小節ばかり弾くので、そこだけは弾けてきました。アラルガンドでしめくくる迫力のある箇所です。上手くいくと大ピアノニストになった錯覚を味わえます。

ふたつ目

・珠玉の名曲ピアノ・ピース J・パッヘルベル カノン パッヘルベルのカノン ドレミ楽譜出版社 編著者は橋本晃一

上級のページに挑戦。アルペジオの左手がバイヤール風。超低音の和音でクライマックスに突入。中ほども区画毎に違う趣向が感じられてよい曲です。一部に物足らなく感じるところがありますが、何か弾き間違っているのかもしれない。今年から始めたわりには、後藤版を練習してきたせいかな、思ったより譜面が読めます。

・Variations on the Canon by Pachelbel George Winston DECEMBER ドレミ楽譜出版社

大昔に一度チャレンジした譜、再チャレンジ。ハ長調なのでこの響。ジョージ・ウインストンは天才。

アルバム発売後、少し遅れて楽譜が発売されたのですが、

「楽譜はダメ」と、「本人の意思で廃棄された話を、最近になって音楽関係者から聞きました。

でも、今、「George Winston PIANO SOLOS」 HAL・LEONARD という楽譜があるのはどうして？ 不思議と思いついてみました。英語で書かれています。

Exact transcriptions from the recordings authorized by George Winston と表紙にあります。って、ウインストンさんが譜面にしてよいと許可した演奏があるってことなのですね。中には、本人の言葉らしきものも書かれています。今みたところなので、次の機会にご紹介したいと思います。

冒頭から音色が違います。私の耳にはドレミ譜の方が、アルバムに近いように思えます。途中から似て聞こえましたが、よく楽譜を比較すると、ところどころ、音の組み合わせが違ったり、同音符でも切り方が違ったりしています。また、スラーや指番号も、承認版にはありません。その代わりコードがついています。

日本での禁書は、即興だから楽譜ダメという理解をしていましたが、一切ダメではなかったようです。

ウインストンさんの演奏は、毎回少しずつちがうようです。ユーチューブで、1996年コピーライトマークの演奏を聞いてみます。やはりアルバムと異なる、その場での修飾が多数入っています。

そういうえば、当時、アルバムはジャズに分類されておりました。京端のもつジャズのイメージ（夜とかお酒とか煙のイメージです）とは違ったけど、ものを知る友人がそのように言っていて、売り場に行くとかちゃんとジャズコーナーにありました。即興という点でジャズだったのかな？リズムがジャズだったのかな？ウイキの説明には、ウインストンさんは、若い頃ジャズに傾倒とも書かれていますね。今は、癒し系とか環境音楽とかニューエイジに分類されていますが。

原曲のカノンが属すバロック音楽には、通奏低音と上声部。そういうコアがあります。変奏遊びですね。ピアノの演奏にバリエーションができてくるのは、その精神を尊重してか、はたまた、偶然、趣向の似たジャンルだったのか、ともかく、考え方は一致しているように思えました。

そして、承認楽譜は、ウインストン編曲のコアと本人が考えるもので、そこからのアレンジを自由にしてほしいということなのかもしれません。

ドレミ出版の楽譜をその通りに弾こうとしている京端は、筋に合ってなさそうですが、DECEMBERの音の並びが好きなので、いいのです。ということになります。

6年間の修行は他の楽譜バリエーションへのチャレンジを楽にしてくれています。今回はソレノにも成果があればいいなあ。

最後までお付き合い頂きありがとうございました。

了

第25弾関連動画

： YouTube とアップしてくれた人に感謝

・ 旭化成不動産レジデンス株式会社 ATLAS CM

↳ カノンが使用されています

・ ザ・ドアーズ「ハートに火をつけて」

↳ 冒頭にカノン入ってませんか？どうでしょう？

※今回の動画は、本編と無関係。みつけたカノンの紹介です

森ちゃんシリーズ

熱帯夜に枕並べて 〔森と沼田編〕

秋楽和音

1. 赤い髪

198*年3月の夜、佐々木シンは、ポケットに預金通帳を入れ、近畿地方の寂れた駅から急行列車に乗った。

時期的に、仕事を探し、住む場所を探すには遅かったが、できるだけ早くその地を出たかったのだ。父母も妹もそれぞれ既に生活を別の場所に移していた。憲一とあずさは二年前に島に戻り、一年前にはセンが大学進学で去った。

赤井は、西荻窪で不定休のコーヒー店をやっている。十数年の違う友達だ。

シンが小学生の頃、なぜか、母が全国行脚を始めた。妹のセンは憲一と島に残り、シンは同行させられた。

2年後ふたりのもとに戻った。

父母の間に何があったのか。一種の冷却期間だろうか。おそらく何もなかったのだ。思い立ったことを実行する。妨げない。その信条のせいだろう。

熊本の農場は3つ目の滞在地だった。居心地がよく仕事もあったので半年ほどいたように思う。学校にも通った。

赤井はそこで働いていたボヘミアン崩れ。当時20代半ばで、気おくれするシンに馬の乗り方を教えてくれた。今でも手綱を取る腕の日焼けが、顔より先に記憶の中でクローズアップされる。島に戻ってから、家族4人で他県へ移ってから、ふらりと現れて、旧交を温めていく。

朝、到着ホームで、手のひらの数字を見ながら、キオスク裏

の公衆電話でプッシュボタンを押した。

前夜、久喜の両親に挨拶を済ませた後、作業場から島にかけると、あずさが出たものの、さあ、というので、憲一は？と聞くのと出かけたという。他の交友記憶をたどって入手した番号だった。

ピポパという音のあと、しばらく待つと、

「はい」 無然とした声が出た。まだ寝ていたようだ。

「佐々木シンだけだ」

トーンが変わった。

「お、シンか。どうしてた？」

「暫く泊めてくれない？」

沈黙に入りそうだったので「住むところ見つかるまで」、更に「上京したんだ」と続けた。

「急だな」

これまでの振る舞いを思えば、それはあんだたろ、と言いつたが、早朝の非礼もあり、「お願い」と下手に出た。

それに野宿は避けたい。「まっいいか。場所分かるか？」

「住所と駅教えて」

言葉とは裏腹に赤井は、気持ちよく迎えてくれた。

この若者が節度を守り、決して人の邪魔をしないと知っていたし、話し相手として悪くないと分かっていたからだ。上京の理由は聞かず、住む場所がみつかるまで好きなだけ居ていいと言った。

大衆的な居酒屋や食堂が並ぶ繁華街のはずれ、古い3階建てで、壁にはツタが這っていた。看板建築かと思ったが、実際にコンクリート作りだった。周りも古びた建物が多く戦後の商店街的な生活臭がある。

住居は2階。その上は大家の倉庫。外の脇階段を使って案内されると、もとは事務所か店舗とみえる間仕切りのない部屋に、家具や衣類、それにベッドが置かれていた。雑多で雑然と

しているが、まだ一人二人寝泊りできる余裕はあった。赤井から寝場所の指定を受け、水回りがどこにあるかを確認してしまえば、することもない。上京といっても離婚に伴う衝動的なもので、それまでとは逆の場所に行ってみようという思い付きだ。かつこととした目論見はなかった。

店は昼前に開店。カウンタールに入ることにした。

客はポツポツ入ってくる。ドアベルが鳴っても、赤井は、いらつしやいませの声をかけない。小首傾げの挨拶だけだ。客の方も同じ。常連なのだろう。注文すらしな客もいて、カウンタールに積まれた灰皿を取って着席すると、脚を組んで火をつけ、日の差し込む店内に靄を作っている。

番茶を持っていけ。それと小皿にオカキを少し。メニューがない。客が湯気を嗅いで、思い出したように会話が始まる。

寄せ集めの椅子やテーブル。楽器や異国のものと思われる怪しげな土産もの、手作りろうそく、エトセトラ。掃除が行き届いているとはいえない店内に違和感なくはまっている。駅に近い場所柄か、商用の通りすがりも、また、タウン誌を見たらしい緊張した顔の若者も入ってくる。

夜はバーに変わった。やはり常連が多い。あずさや憲一ともつながりのある連中と思えたが、知った顔はいない。

かかる音楽は雑多。膨大な量のCDやレコードから選曲し、リクエストにも応えている。BOSEから流れるロックやジャズ、そして民族音楽。仲間うちのコンセンサスなのか、合間にかかる演歌やアイドル歌手の曲に歓声があがっている。

酒種もワールドワイド。趣味と実益を兼ねた酒場。

周囲の居酒屋が閉まったあとは、客をよけながら、瓶や盆を持ってテーブル席をまわるようになった。

そのうち赤井の女友達が現れて手が増えたので、シンは2階に引き取った。

目覚めると日の光が、窓にぶら下がったカーテンの隙間から差し込んでいた。壁時計は10時に近い。赤井と彼女を起こさないよう、脱ぎ散らかした服に足を取られないように部屋を横切り、階段を降りた。

西荻窪の駅から中央線に乗ったが、二回目の乗車とはいえず、何がどの駅にあるのかを知らないで、立ったまま車窓を眺めた。桜の咲き始めた川沿いの土手を過ぎる。このままでは東京駅に戻ってしまう。ちよつと面白い駅名がアナウンスされたので降りることにした。

楽器店や学校が目につく。思いつくまま一方通行路の緑萌す歩道を進むと、ビルへのアプローチに並ぶ箱型ケースに目がとまった。近寄つてのぞき込むと、ひとつ目のガラスの中には、何を表したものの半分からないオブジェがあり、ふたつ目のガラスの中には、工業部品を図案化したらしい絵が貼ってあった。

見上げると、屋上から『生徒募集』の白い垂れ幕がはためいていた。うん、これ、これ、と案内をもらいに建物に入った。

願書の締め切りは月末ということだった。

西荻に戻ると、赤井に「**学院」に行つてイラストの勉強をすることにしたと話した。

数日かけて書類をそろえて申込みに行き、その足で家賃の安いアパートを探した。空いていたのは北向きの部屋だったが、日中居ないのだから関係ないだろう。その代わりユニットバスはついていて、埼玉県に近く、学校へは電車通学になる。だが、周囲にはスペースを感じる。

「逆」を目指したわりには、郊外であると気づき、苦笑してしまった。

赤井が、不要となった家具や家電を常連から貰ってくれたので、家財はほとんど買わずにすんだ。見た目はどれもキレイだったが、ゴミ置場から失敬した品が含まれるだろうことは

想像できた。赤井の仲間と言わせれば、一種の社会貢献である。ともかく、年度初めには準備が整った。

「遊びにこいよ」

赤井は、店の棚から適当なコーヒークップを取り、餞別、と差し出した。

一年分の授業料と賃貸契約で、預金の半分が消えた。2年目の授業料と生活費を何とかしなければならぬ。

アルバイトも決まり、4月中旬となる明日、あのビルで入学式とオエンテーションがある。いよいよ新生活の幕開だ。

◇

9時に指定の教室へ行ってみると、既に席の大半が埋まっていた。中には三十をゆうに超えたとみえる人間もいたが、ほとんどは高校を卒業したてのようだ。年齢があまり変わらなにも関わらず、幼く見える。

そのせいか、死んだ子の年を数えるようなマネをしてしまった。もし、生きていたら、どうだったろう。大きくなって、ここに居るあいつらみたいになつたとして、その時、俺は、ななめ前に座っている奴くらいだ…。

望んだわけではない誕生と死が、簡単に起こってしまったことについて、自分には責任があるのかないのか、何故そういうことになったのか。完全には消化しきれずにいる、そう思う。そして、ついつい、意味のないことを、結び付けて、せんのない追想に取り込まれてしまう。気づいてはいるのだが、オリエンテーターが来たので注意をそちらに向けた。

隣席は渡辺といった。26才で、クラスでは三番目の年長だった。大学を中退し、集中アルバイトで小金をためては、各国を旅行したという。本業はマンガ家なのだそう。しかし、自分の作風では食えないと見切りをつけ、就職率の高い学校を

職安代わりに選んだという。好奇心旺盛、世話好きの性格と自己紹介した。人の交流を促して化学変化を見るのが趣味とも言う。年齢も中間であり、進んでクラスの調整役をはたすようになった。

後に、振り返ってみると、シンは、この渡辺によく声をかけられた。実際に気に入られていたようだが、周囲から浮いた気配が興味をひき、また、気も使わせたのかもしれない。

確かにこのころからシンは、少しずつ内にこもるようになっていた。本人も意識していたのだろう。少しでも、外の世界に連れ戻してくれる人間は大切だった。それに、渡辺の旅行談や世相批評には親世代とは違う視点があり、批判好きの感性とも呼応したので、この交友は楽しめたようだ。

授業が始まってしばらくしたある日、渡辺から飲み会の誘いがあつた。

なぜ学校のない土曜日の夜に設定したのかは分からないが、仕事は休みだったので、酒には付き合えなくても、新しい地での交友を広げたいと、シンはOKした。

会場は、学校近くの居酒屋チェーン店。店の奥の広いところに横一列でテーブル席が設けられていた。

同じ高校出身の2、3人が言い出して輪が広がったという。知らない同士も、同じ専門学校という共通性から、話のネタには困らず、間もなく打ち解けた。

あちらこちらで声が大きくなった。ビールやサワーのジョッキが次々に空き、追加オーダーが飛ぶ。トイレに空いた席に移動するものも出てきて、冒頭の自己紹介を聞いていなかった者は汗をかいた。

周りは、タガが外れハメが外れていく。最初は会話に加わっていたシンだが、モードの違いが大きくなりすぎて、口を挟む余地がなくなってきた。おまけに、テーブルのあちこちで嘔き

あがる煙にあてられた。

酒とたばこ。どちらも、体質に合わない。赤井のところでは宿代代わりと店を手伝ったが、コンパならつきあう必要はないだろう。交流は教室でもできる。

宴会2時間メニューの終了を機に帰ろうとしたが、渡辺が引き止めた。他の全員が行くという。新しい生活の、それも最初の飲み会だから短慮してもいけないかと、嫌な予感しかしなかった2軒目に、付き合ってしまった。

案の定、テーブルの随所に、呂律が回らない奴、大声で話す奴、寝てしまう奴、吐く奴が出た。騒ぎと煙をよけるため和室の端に座ってはいしたが、結局は同舟である。酔っぱらうのが勲章って訳じゃなし、ガキは困る！と心中毒づかなかつたといえばウソになる。

3軒目は絶対辞退しようと思心していたが、幸いお開きになった。

その代わり酔っぱらいを一人押しつけられてしまった。方向が同じだというのだ。

「おい、沼田、この人が連れて帰ってくれるからな。途中でくたばるなよ」

同窓らしい友達が、朦朧としたそいつを抱え、書いた紙をシンに渡した。街灯に照らすと、住所は確かに同じ路線沿いだ。

2、3駅手前の場所である。

支える手をゆるめると自重で落ちていく。縁石に置いて友達は、道路に出た。

タクシーは稼ぎ時だ。車はすぐに停まり、後部座席の扉を開けた。沼田はよろよろ立ち上がろうとする。友達は補助にまわった。シンは、運転手に合図を送って、反対の扉が開くと乗り込んだ。沼田が押し込まれ、最後にカバンが投げ込まれ「じゃ、よろしく」とドアが閉まった。

二つめの信号停止で、ぐらりと揺れた上半身が倒れた。今はシートに臥せっている。一次会も二次会も席は離れていたが、確か、かなりはしゃいでいたやつだ。加減を脇まえろよな、まったく。

目的地にタクシーがついた。「一人下ろす」と断り、自分側のドアを開けて、反対側に回る。

「家だぞ」

袖をつかんで起こし、カバンと一緒にひっぱり出した。

沼田はしやがんだまま「うっ」とうなって、その場に吐いてしまった。

仕方なく料金を払いタクシーを行かせた。

しばらく休ませた後、沼田をかかえ、臭気をかがないよう息をできるだけ止めて、アパートの階段を上った。

意識がないように見えるのに、ちゃんと脚を動かしているのが、不思議だ。眠りながら手を引かれて歩いて保育園児のようなものか。

2階だてのアパートの2階。階段に近いのが幸いだつた。

「鍵は？」

答えはない。肩にかけてきたカバンを探るとすぐに見つかったので、開けて中に入った。

沓脱に続く板間にもかく沼田を座らせた。スイッチを探して電気をつける。1DKのフローリングに机と棚。布団は押し入れのようだ。仕舞つてあるということは、ズボラでもないということか。

「着いたぞ。布団ひいて寝ろよ」

「うっ」目を閉じたままうなったが、一向に動こうとしない。仕方無く押入れを開いて布団を取り出した。

敷き終わると姿が消えていた。玄関脇のトイレに電気がともり、ドアが半開きになっている。

みれば、便器をかかえて寝ていた。

「あー、また吐きやがった」

脚から引きずり出して、タオルをさがして濡らし、汚れたところを拭いてやり、服のまま布団に寝かしつけた。さらに、風呂場の洗面器をとってきて、ドアポストにささっていた新聞をちぎり敷いて、枕元に置いた。そのあと、トイレも掃除した。何で自分がこんなことをしているのかと思ったが、やめて帰るのは、やはり薄情に思えた。

終わると、締めた鍵を、新聞受にほりこんで帰った。

電車はないし、タクシーも通りかからなかったので、3駅も歩いてしまった。

月曜日の朝、沼田と電車と一緒に帰った。

趣味の悪いかっこうをした奴がいるなど思ったら、沼田だったのだ。

シンに気づくと、ここにこしながら寄ってきた。

「すいません、ご迷惑をおかけしました」

そして続けた。

「日曜の朝はもう大変。

帰った記憶もないのに、布団の上に寝てる、一瞬財布を確かめたりして。

机の上の、メモを見ても、訳わかんなかったですよ。岡村に電話して、やっと理解できました」

沼田は、一人で話していた。

「喋ってないのに、良く分かったね」

「あなた目立ちますもん。それに渡辺さんの友達でしょ」

電車を下りて、坂を登る。

沼田はずっと喋りっぱなしだった。

「岡村って同級生なんですすよ。埼玉の**高校。中学も一緒。ここも一緒になるとは、思わなかったけど。腐れ縁なんすかね。実は、僕、大学行きたかったんですけど、全部おっこつちゃ

って。友達はみんなどつか受かったんですけどね。受験運がなかったのかな」

「運の前にやることやったの？」

「きついなあ。ちゃんとやりましたよ」

「来年、受けなおせば良かったのに」

「そこまでして行っちゃって。こつちのことも興味あったし、親も賛成してくれたんで」

「こつちって？」

「映像。どつかの制作会社に入ってカメラ回そうかなって」

「映像？そんな学科もあったのか、同じ校舎？」

「美術の隣」

土曜の飲み仲間はその後も交流が続いた。映画サークルのクラブ室が溜まり場だった。部外者も入れたし、行けば、誰かしらいた。しかし、シンは月曜から金曜日までアルバイトをしていたので顔を出したことはない。特別の場合を除いては。土日は家で課題に時間を割いていたが、渡部からの誘いがあれば、だいたいは行くようにしていた。

2回目の飲み会の時、シンは役割が固まりつつあるのを感じた。

酒癖の悪い沼田の送り役だ。

そいつは御免と宴も半ばで切り上げようとすると、岡村が先手を打った。

「悪いけど、今日もあいつの面倒みてくれる？ ああなるともう潰れるのは見えてるからさ」

「帰るところなんだけど」

「頼むよ、皆、逆方向なんだ」

「あれって、受験の後遺症？」

「たぶん。落ちた時、ひどい自棄酒して、その時から奇妙に明るいんだよ」

厚かましいことに、以後、沼田もすっかりシンをあてにしはじめた。「佐々木さんがいるから今日は飲もうつと」悪びれずに宣言するのだ。

沼田と交友の天秤。シンは諦めるしかなかった。ただ、近くには座らなかつた。連れて帰ってはやるが、それ意外は関わらないという意思表示である。

◇

課題とアルバイトで過ぎていった夏だが、仲間たちと、鎌倉の海へ一泊旅行もした。

色とりどりの水着や遊具が波間に上下し、その隣の区画ではセールが林立している。浜にもカラフルな水着やパラソルが並ぶ。

砂浜にシートを敷いてグループの場所をとると、仲間たちは、おもしろいおもしろい夏の海を楽しんでいる。

シンは、潮の匂いが好きだ。くつろぎを思い出す。考えてみれば、海を遠ざかったことはほとんどない。だけど、この1、2年は、潮風を感じる余裕はなく、動乱していた。

良いことにも悪いことにも、自分なりに最善かつドライに対応してきたつもりだが、今は迷いがある。心が煤けたようにも思う。若者に交じれば、健康な意欲を取り戻せるかもしれない。楽しいことがはじまるに違いない。いや、考えることすらせず、ただ、くつろいで、今に集中していればいい。

立ち上がると、海の方に歩きはじめる。

呼んでいるものがある。

谷村と沼田と渡辺だ。

行ってみると、サーフボードがひとつ波間に浮かべてあった。

「乗れる？」と渡辺が聞く。

「やったことないけど」

「乗ってみなよ」と沼田。

谷村のボードだ。ローマ字で名前が刻んである。

「やり方みせて」とシンがいうと、谷村は実演してみせる。

谷村をまねると、サーフボードの上に立つことができた。

「すごい、一回でできた」沼田が感心する。

谷村の手ほどきで、間もなくシンは波に乗れるようになった。

「佐々木さん、器用だもんな。運動神経いいもんな」と沼田はしきりに感心している。

「俺なんて中学の時から練習して、いまだに落っこちるのに」

沼田は、どうやったらバランスをとれるのかコツを教えてくださいという。

「谷村の言ったとおり、やっただけじゃないか。谷村に教えてもらえよ」

シンは取り合わない。

宿は、ペンションの並ぶ中、古風な民宿で、誰かの親戚の家だった。7月になってから無理にいられてもらったので、広縁のある6畳に男子7人、4畳半に女子4人という詰め込みようだ。

夕飯がすむと何人かは、もう少し洒落っ気のある外の店へ鞍替えした。残りは、近所の酒屋へ行き、レジ袋を提げて帰ってくる。部屋の奥で酒盛りを始めた。

シンは、外へ行った組だったが、11時に戻った。直子と美穂と一緒に、まだ店にいる者もいる。

すでに全員の布団が並べられていた。荷物を置いて確保しているところもある。しかし、煌々とした蛍光灯の下、酒盛りに終わる気配はない。

明朝一足先にたつシンは、入口近くに自分の荷物を移動した。

すると、酒盛りの輪にいた沼田がとことこやってきた。

「佐々木さん、尊敬しちゃうよ。どつたら乗れんの？」

「酒やめたら乗れるぞ」

「んと？」

「ただでさえ鈍いののに、2日酔いで乗れるわけないだろ」

「どっかでやってたの？」

「やってないって言っただろ」

「ふーん、佐々木さんって」

向こうから、沼田を呼ぶ声がする。マージャンをしようというのだ。折り畳み式の簡易テーブルから缶やペットボトルや酒瓶を畳に移している。

今忙しいからと断った沼田は隣の布団に寝そべった。

こいつ、こんな顔だったのか、とシンは思う。

布団の主から「寝るからのけよ」と声がかかった。寝相が悪い沼田は窓際の出っ張りどまりと決まっていたのだ。

「そっちで寝ていいよ。俺、ここ」

「えっ、沼田が隣？やだ！」

牌を取った谷村が言う。

「ふん、じゃ廊下で寝たら」

シンの方を向くと「佐々木さん明日帰るの？」

「バイト」

「今度、また来ようよ。コーチしてよ」

「谷村に教えて貰え」

「谷村嫌い。教えるの下手だもん」

ビーチボールが飛んでくる。パラパラ砂が落ちる。谷村からの見舞いだ。

結局、その夏シンは2回も海に出掛けた。

かなりのポンコツだったが、サーフボードを積んだ車で迎えにきた。ボードも何年か使っているようだ。

「中3の時、親にねだって買ってもらったんだ。結構練習したんだけど、上手くならなくてさ。本も買って研究したんだけど」

「スクールに入れば良かったのに」

「入ったんだけど、落ちこぼれちゃって。みんな上達してくのに、俺だけ、」

シンは、笑いだしてしまった。

「救いようがないへたってこと？」

「笑うなよな」

「悪い、悪い」

こいつ、ずれてるよな。自分より初心者俺をコーチに頼むっておかしいだろう。

海に着くと沼田は着替え、準備体操をして、沖へ出ていった。

へっぴり腰だなあ、とシンは思う。ボードと波と一体になれない。もつとよくら感を使えよ。

「ねえ、どこが悪いんだと思う？」と水から上がった沼田が聞く。

「もつと意識を下に持ってけばいいって気がしたけど」

「そうか」つと沼田は再び海に行く。

少し試していたが、前よりは良くなったようだ。

しばらくするとまた戻ってきて「どうだった？」つて聞く。

シンは思ったことを2、3言つてやる。

沼田は質問して納得して出ていくを繰り返した。

そうこうしているうちにだんだん様になってきた。

「俺、佐々木さんの言うこと、なぜか、よくわかるんだ。あ、そうかって。藪のなかにあつて見えにくかったものを、捕まえて見せてくれてる感じ」

帰りの車の中で、沼田は言った。

「同じことを、もう誰かが言っているとと思うけどね」

「そうかな」

「まあ、役に立ったなら嬉しいよ。多少上達したし良かったな」

「またコーチしてよ」
「空いてたらな」

シンの言葉は響くと言うし、沼田の行動や物事の感じ方がシンには見える。100%とはいかないが、他の人間とは違うことも確かだ。

そうして、部屋を歩き来する間柄になった。

沼田は素朴に、シンを尊敬した。対等な友達ではあったけど、もやもやを、言葉で切り出し、解決策も示せることを、非凡で、より大人に近い人物と感じていたのだろう。鋭すぎて反発することもあったが、いつもいつの間にか許した。

一方、シンは、自分の嫌悪もあてにならないと自分にあきらめた。

慕われてみると悪い気はしないし、遠目で見るのと近寄ってみるのでは違うと思った。何かの拍子にノイズが消えて静けさにつつまれることがある。素直で善良なもの。真摯を呼吸している物体。くつろぎを与えてくれるもの。

夏の終わり、沼田の髪が赤くなった。

部屋を訪ねたシンは気付いた。

「髪、赤くなってるよ」

「焼けちゃうんだ。前髪が。特に。冬には元に戻ると思うけど」
沼田は、髪を引っ張って、日に透かしてみていた。

つづく

家に関する緑の行方

丘乃恵

目標は脱炭素。カーボンニュートラル。その中には森林管理も入っているとかな。

ちよつと不思議なのは、新しくできる住宅の敷地には緑が少ないこと。まったくない家もあります。

電力削減では個人の小さな努力を求めますが、炭素に關して個人で緑を増やす努力は特に勧められていないようです。ソーラーパネルやプラスチック製品の削減はあるのですが、個人レベルの緑って効果ないのでしょうか。

産業が増やした二酸化炭素だから産業で責任を取るといふことのもかもしれませんし、宅地の緑は時流に合わないからかもしれません。

庭の緑は、手入れが面倒（お金と手間が必要）で、近所トラブルの元（枝や落ち葉の越境、それに虫も来る）。近所関係も神経質になってるし、苦情がすぐにお役所にいきます。

緑をめぐるより平穩を保ちたい。その心理が勝つ場合も多いでしょう。策としては、室内への緑の移動。インテリアになるし。

宅地の緑が減ったことは、自動車の普及とも関係ありそうです。地方都市では一家に複数台。一人一台と言ってもいいくらいです。空スペースは車置き場。

令和の時代、宅地面積は狭くなっています。旧住宅地での部分開発（寮の跡地とか、お屋敷街）を見ると明らか。新旧で面積に差があるのを見てください。

狭くとも駐車場はある。そして、新宅地では、家と駐車場の隙間を埋めるものは、玉砂利や人口芝。植物は、あってもプランターかシンボルツリー程度。

ペットも緑も小型化清潔化して家の中へ。地面を占有して

はいますが、土との深い付き合いは少なそうです。緑的にはマンションの各戸を平地に置いたような気も。

振り返って、昭和の時代は、庭付き一戸建。生垣や植え込みがあり、生きた芝生が植えられていました。戦後にしても、未近くまで、宅地に車は一台程度。無い家もそれなりにあったと記憶しております。庭木の剪定や落ち葉掃除もあたりまえ。自ら地面を耕し花壇作りも。

なぜ庭は続かなかったのか。一

大学進学率が上がり、子どもは早々に家を出て、そのまま別の町で所帯をもつことに。若者がいなければ、庭は手に余り出します。荒れれば苦情の種に。だから、高齢者宅では、生垣をバツサリ切り倒すことも。

共働きの月給とりが増え、休日も増えて、その過ごし方も多様になりました。ご近所付き合いも変わり…。

と、緑の優先順位は、下落して今の形態になってきたのでしようね。庭なし一戸建て。駐車場付き一戸建て。

統計的な話は調べておりませんが、個人宅の緑が減少し、自家用車や家電が増えても、脱炭素という点では、エネルギー効率とトレードできているのかもしれない。

ただ、筆者にとって、緑の少ない町内は淋しいです。

別の話題

新品を好む国民性だそうで、中古住宅にはあまり人気がないとか。（中古車はいいのか！？という疑問はありますが）。

空き家が増える一方で、山や田畑が新規宅地になり続けて、やっぱ緑は少なくなっていく。

古い宅地を森林に戻せばいいのですが、そんな話は聞かないなあ。

空き家は住宅地に点在していますね。森、いや面積にみあうのはせいぜい林。それっぽく戻そうと、放置すればご近所から

怒られます。木が生えてくる前に草刈れコール。調整区域であっても隣に人が住んでいれば同じ。(それ以前に、宅地を空き地にする税金が上がるので、そもそも更地にすることは控えます)

でも、空き地の草つてことのほか勢いがいいです。炭素吸ってメキメキ育ってる感じです。

殆どの宅地は、もとは森林(田畑も経て)だから、歯抜けになつた住宅域はきつぱり解散して、樹木に席を譲るのはどうでしょうか。住人は町の空き家に移るといふこと。そうすれば、新規の造成とカーボンニュートラルができそうです。でも、そんな大胆な、というか強引な政策は、隣国ならともかくこの国ではないでしょう。

けど、仮に空き家率30%を超えたらその地区は森林へなると法律を作つたとしたら、どうでしょう。そりゃたまらんと町内会が率先して、住人探しの営業をして、結果、造成は減るかもしれません。

考えると、耕作者のいない農地問題、食えない林業とも絡むし、きつと他にもいろいろ絡むから、田畑と山の宅地化は、省庁横断的な問題と思われ、宅地だけでなく商業地域や工業団地としての開発もあり、緑の増減は、結局は国土計画ということになりそうです。実際には、いったい誰がどのように、国土利用計画を決めているのでしょうか。勉強不足で今は分からないけど、知りたいものです。

この数十年の宅地化を見て(身近な限られた範囲ではあるけど)、筆者の頭に浮かぶのは、エントロピー増大と熱死という言葉。または、緑のかたまりと灰色のかたまりといった大きな区分けが、小さな緑と小さな灰色のモザイクに化して、ついには、百平米ミクロンのガレキの山にペンペン草が生え、色を失つた景色です。

筆者は、色のメリハリの利いた景色が好きです。



脱炭素は、森林管理を謳いつつも、ひたすら人間中心のテクノロジーを追究するのでしょうか。(なにか画期的なことが起こる可能性はいつでもあるけど)

今、屋根ではソーラーパネルがトレンドですが、あわせて人工光合成ができるといいです。壁でも玉砂利でも人工芝でも人工光合成をする資材です。

将来的には、デンブンの人工同化で、製粉までして台所に運んでくれる脱炭素が便利です。米、麦、芋などスイッチで自由自在。お呼ばれの日にはダイヤモンド(炭素の結晶です。等軸晶系、高度10)を産出してきてもいい。宿題の工作としてセルロイド人形を3D印刷したり、人工材木で家具もできたりして。

夢は膨らみます。製造レシビが公共財になっていけば、何も買う必要がなくなるかもしれません。

アウトプットのバリエーションが増えて、より最終形(ケーキとか本棚とか)の生成まで自動化できれば、いうことない。って、いつになることやら。

もはや給料は、二酸化炭素。

今度は、空気中から二酸化炭素がなくなってしまいう。固定しすぎてスノーボールアース再び! ——なんてないか。

実際に人工光合成は研究されています。でも丘乃のイメー

ジとは違いました。植物の光合成は炭酸同化であり、大気中の二酸化炭素を吸って、でんぶんやセルロースを作って蓄積し、最後は枯れます。蓄積した分、大気中の二酸化炭素が減り、土中に埋まるイメー

ジです。一方の、人工光合成は、まずは、二酸化炭素レスの発電。二酸化炭素を減らすのではなく、増やさない。

水を分解して水素と酸素にすると、水素が発電使えるのですつて。装置はシート状にできるそう、陽のさすところで水に着ければいいのですつて。

次の段階では、減らす、もできます。

水の分解でできた水素と、二酸化炭素から、プラスチックを作るのですつて。(大気中から取れば減る、工場排気を使えば増えない)

でんぶんの代わりに、プラスチックかあ。

ちよつと複雑な気分。マイクロプラスチックは人の血液からも検出されるらしいけど、はやく安全なプラだけになってほしい。

ところで、丘乃は以前に、小説「緑の肺」で、栄養補給と酸素供給のできるウエアラブルオキシジェン、製品としては光合成シールを考えましたが、実際に、人工的に植物光合成を模すのはとても難しい技術のようです。

ただ、丘乃版のシールは、技術というよりは、緑藻の表皮細胞共生なので、藍藻様はその気になってくれさえすれば、実現できるかもしれません。いや動物側が細胞の門戸を開けばかな。

あるオーストラリア人から聞いた話は印象深いです。ある島の民のこと。サボテンを大先輩と考え、頭を垂れる民がいるとか。細胞に刻まれている地球史生命史に今も耳を傾けているように思われました。



おまけ (読書感想文)

「果てしなき流れの果に」は小松左京の傑作。
1965年の作。

哲学。かつ、エンタメ。

思考と情緒を揺さぶる。

壮大

ロマン

「三体」3部作(秀逸です!)を読み終えたら、「果てしなき流れの果に」に戻ってきてしまいました。

数年ぶりに開くと、我はこの本の上に形成されている!と、その影響に驚きます。読むたびに思うことではあります。

最初に読んだときは、第3章以降、時間、空間、時系列、人物関係が分からなくなりました。

少年SFファン12才の読解力では歯が立たちません。それでも、味は分かります。

面白い!と感じました。それもかなり面白い、いや、一番おもしろい。

数十年の間にいろいろなSFを読みました。

この本も、何度か読み、そのたびに、やっぱり面白いと思います。

そして、今回やっと、全編通して時間・空間・時系列、人物の相関図を作成しました。すっきりしました。

あとは面白くなるまで読み倒したいものです。

もはや、待つ女は古風過ぎると思いますが、待つものが登場しなければ、物語の着地点がなくなります。味わいの決め手も。

2002年「星の声」(新海誠)では、待つ側のせつなさは、それは淡々と過ぎていく日常でもあるけれど、男子が表していました。それぞれに期待されることも変わっていきます。

どうあがいても不可知。

それはとても残念なこと。やはり知りたい。

そこで、客観性ある科学的知見を並べ、つないで、星座よろしく世界図を描きます。思考と情緒で。神の目からは、ロールシャハ投影？それも分らないけど、性です、ね、やっぱ。慰めと弱気にもいいけれど。

さらに、おまけ

前号で、精子の運ぶ遺伝子と能力の関係を考えてみましたが、先日ヒューマニエンスを見ていたら、「尾っぽは、頭が運ぶ遺伝子が元になってできているので、競争を勝ち抜く尾っぽの優秀さは、遺伝子の優秀さを表す」と言っており、答えを得ました。

遺伝子ってタンパク質を作るものという理解です。たんぱく質って建材のようなもの？

細胞には、それ以外の物質もあると思うのですが、これらは一体どこからきて、どう働きたのか。エレルギーの輪からなのか。疑問はつきません。今どこまでわかっているのでしょうか？なかなか知る機会がないのが残念です。

終

未来世界仕様書は文芸雑誌です
お気づきの点がありましたら下記までお知らせください

未来世界仕様書 Vol.25 ver.1.0

発行:丘乃恵

2022年 11月20日

Mail: mgz_miraisekai_shiyosho_100523@yahoo.co.jp

Twitter: @OkaNoMegumi